



いきいき農業高校 第四回 北海道大野農業高等学校

一 学校の概要

本校の所在地である北斗市は、平成一八年二月に旧大野町と旧上磯町が合併して誕生した比較的新しいまちで、平成二八年三月に開業した北海道新幹線の北海道の玄関口「新函館北斗駅」が開業した地域でもあります。

旧大野町は函館市から車で約三〇分の、農業を基幹産業とする町です。北海道水田発祥の地として北海道の水稲栽培をリードしてきました。

大野農業高校はこの旧大野町に昭和一六年に開校し、現在まで約八、七〇〇名の卒業生を輩出するなど、道南地域

の農業高校拠点校としてその役割を果たしてきました。現在は農業科・園芸科・食品科学科・生活科学科の四学科を有する生徒数二八〇名の全日制農業高校です。昭和四四年には文部省の自営者養成農業高等学校B型校（平成一〇年に農業経営者育成農業高等学校に名称変更）の指定を受け、経営者育成寮「清和寮」では、農業科、園芸科、生活科学科の生徒がそれぞれ四ヶ月間入寮しています。

本校生徒の出身地は二〇市町村にわたり、地元の北斗市及び隣接する函館市や七飯町からの生徒が九五%を占めています。農家の子弟は年々減少し、非農家の生徒が増加する傾向にあります。学習面では専門科目と併せ基礎学力向上に重点を置いた指導を行っています。また、資格取得にも力を入れ、二七種類の資格取得講座を開設しています。卒業生の進路状況は進学（大学・短大・専門学校）が約三割、就職が約七割と



北海道水田発祥の碑

なっており、七年連続で進路決定率一〇〇%を達成しています。

二 地域と歩む農業高校(情報発信源としての農業高校の役割)

■「食」で人を繋ぐまちづくりフォーラム 2018 in 大農く農と食からの情報発信く

本校周辺には渡島農業改良普及センター、道南農業試験場、JA新はこだて等、多く



フォーラム風景

の農業関連機関が集まり、また、多くの先進的農家や観光農園、六次産業化に取り組んで業績を伸ばしている酪農家などが存在しています。

北斗市や近隣市町には地元産の優良食材を活用したレストラン等の飲食店が次々と誕生しています。このフォーラムの目的は、このような環境の中で、農業高校の学習内

容である「生産」「加工」「流通」「販売」のフードシステムを学ぶ生徒と農業関連産業に係わる方々が一堂に会し「食」について考える機会を持つことにあります。

農業を取り巻く環境の変化として国際化、情報化、技術革新の進展等にとのように対応してまちづくりを進めるべきかとの思いから、鎌田一宏校長が中心となり、平成三〇年八月二五日に本校体育館で開催されました。

今回のフォーラムは基調講演、パネルディスカッション、学校農場公開の三部構成と

し、運営については受付、司会、試食・販売コーナー等全て生徒が行いました。会場には幼稚園から大学までの教育関係者、行政機関、農業関係者や一般町民の方々、約一三〇名が参加しました。

■JGAP認証取得の取組

北海道水田発祥の地から

GAPを広める

本校ではJGAPの認証を一〇月一五日に取得しました。北海道の農業高校でのGAP認証取得は四校目となり、米（粳・玄米・精米）までの過程でのJGAP認証取得は初めてとなります。

取得した認証生産物の米（粳・玄米・精米）については、農業科水稻専攻班の生徒一五名（三年生六名、二年生三名、一年生六名）が取り組みました。昨年一月から研修を行い、二月には模擬審査を実施しまし

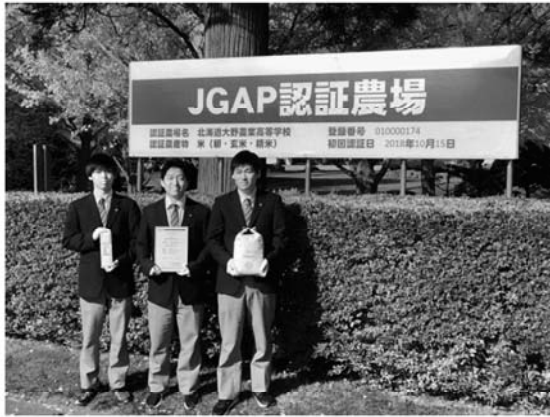
た。その後、農場の整備や帳簿の整理などに取り組んできました。九月四日には生徒たちがGAP審査員からの質問に対する説明と実地検査を実施しました。一〇項目にわたる指摘を受けましたが、その改善に取り組み、認証取得となりました。

JGAP認証を取得したことにより、二〇二〇年東京オリンピック、パラリンピック出場選手への食材提供のエントリーが可能

能となりました。

専攻班の班長は「実際に水稻を栽培しながらの認証取得で大変でしたが、各管理点の意味がよくわかり理解することができました。」「農業高校がGAPを取得することにより、今後は地域にGAPが広がっていくような活動をしていきたいです。」と感想や意気込みを語ってくれました。

今回生産した米は二月一〇・一一日に



認証農場の看板前にて



書類審査（2018.9.4）

東京で開催されました「二〇一八年全国農業高校収穫祭」で販売され、好評をいただきました。

本校では今後、米以外にも力を注いでいきたいと考えています。本校は、全道の農業高校最大規模の果樹園を有していることから、果樹や野菜でのAS-AGAP認証取得に向けた取組を行っています。

東日本大震災から八年目を迎えた二〇一九年三月十一日、犠牲となった方々への追悼の気持ちと、被災地東北の更なる復興を願い、東北と北海道を結ぶ北海道新幹線、新函館北斗駅において、「3・11東日本大

3・11東日本大震災みんなのつとめ



Assistant Center of Certification and Inspection for Sustainability

JGAP 認証書

CERTIFICATE

【認証農場名】

北海道大野農業高等学校

【農場所在地】 北海道北斗市向野2丁目26-1

【農産物取扱施設】 ライスセンター：北海道北斗市向野2丁目26-1

審査の結果、貴農場がJGAPの認証を取得したことを以下に証します。

【登録番号】 010000174
 【認証番号】 ACCIS-G18-101502
 【認証基準】 JGAP 農場用管理点と適合基準 穀物2016
 【認証の種類】 穀類
 【生産工程カテゴリー】 穀物(栽培・収穫・取扱い・精米)
 【認証農産物】 米(精・玄米・精米)

初回認証日	更新認証日	有効期限
2015年10月15日	—	2020年10月14日

北海道札幌市北区北7条西6丁目2-34 SKビル7F

株式会社 北海道有機認証センター

「北海道GAP認証センター」

代表取締役 塩田 彦隆



Assistant Center of Certifications and Inspections for Sustainability



黙 祷



募金活動

震災みんなのつどい」を開催しました。当日はあいにくの雨模様となりましたが、地震発生時刻の一四時四六分の参加者全員による黙祷に合わせ、生徒たちは午前九時から準備に取りかかりました。会場周辺への花のプランター設置、募金活動、函館水産高等学校生徒が思いを込めてつくったストラップ入り缶詰の配布等、積極的に活動しました。

観光で駅を訪れた観光客の方からは「雨の中“苦労様”とねぎらいの言葉をかけていただき、また、快く募金に応じてくれる方々が多数おり、生徒たちもやりがいを感じているようでした。

福島県では依然として原発事故の放射能汚染による農作物や水産物への風評被害が続いており、東北の太平洋沿岸の市町村では人口流出により地元の水産業が衰退する等、同じ農業や漁業、水産関連産業に携わる高校生として少しでも力になればとの

思いから、今年初めて農業・水産の二校共同での開催となりました。

三 農業後継者育成の取組 道南農業経営者育成対策協議会

本会は、渡島、檜山を含む道南の農業発展に寄与するため、北海道大野農業高等学校

校の農業教育振興を通して、農業経営者の育成・確保を図ることを目的として平成二一年に設立されました。事業内容は次の五項目となっています。

- ① 農業経営者・関連産業技術者の拡充・発展
- ② 関係機関・団体との連携強化
- ③ 地域農業振興への助成

- ④ 教職員・生徒の各種研究活動への助成
- ⑤ その他、本会の目的達成に必要な事業

今年度の広域視察研修では、農業経営予定者や農業関連産業への就職を希望する三年生二名が参加し、道央で農業の六次産業化に取り組む先進酪農家の「米村牧場チーズ



工房ブラッツ」、農機具メーカー「ヤンマーアグリジャパン」、乳業メーカー「雪印メグミルク酪農と乳の歴史館」、京極町に昨年完成した「ようてい農協ニンジン集出荷選別施設」の見学を実施しました。

また、農業関係機関の訪問研修では、普及センターや農業試験場の役割や業務内容について学び、実技研修として農業改良普及センターでの土壌診断研修、農業講演会では酪農学園大学教職センター農業科教育研究室の飛谷淳一先生をお招きしての「土壌硬度」についてのお話をいただきました。卒業後の進路に直結する研修とあって、参加した生徒は懸命にメモをとり、わからない点については積極的に質問していました。

四 おわりに

全国的に農家戸数の減少、農業就業者の高齢化による担い手不足、労働力不足が大

きな問題となっています。本校の位置する渡島管内でも二〇一五年度のデータでは販売農家戸数一、七五九戸とこの五年間で一三％の減少となり、全人口に占める六五歳以上の方の割合は四一％となっています。

道南地方の農業はこれまで北海道における水田・畑作および酪農の発祥の地として、歴史的な歩みを続けてきた土地柄ではあるものの、全道的にみて経営規模が小さく、主業農家率が低いため、今後ますますの活性化対策が必要となっています。

その一つとして、「農」「食」「医療」「福祉」が有機的に結びついた地域づくりが求められています。農業は生命維持産業の根幹となる必要不可欠な産業です。農業高校が地域への情報発信源としての役割を担い、農業やその関連産業が果たす社会的意義や役割について正しく認識し、自信を持って地域住民とともにまちづくりに参加していく体制づくりに取り組んで行きたいと思っています。



高齢者との寄せ植え交流会

※ 執筆・写真提供は、山城誠教頭先生に
「」担当頂きました。